

聞きとり能力を向上させるには どのようにしたらよいか

(NHK英語放送の利用をとおして)

足利市立山辺中学校英語研究部

1. はじめに：一

学習指導要領の改訂原案が発表されたころ、その一つの特徴は、hearing, speakingの能力を重視しつつ、実際場面での運用できる力を身につけさせることにあると考えられた。この点過去の本校の実態は、hearing・speaking, reading, writingの3領域の均等な指導を一応配慮し、指導計画を立案していたものの、機器の不足や教師が時間に追われていたなどの理由から、前記hearing・speakingの能力がどうしても低下しがちであったという事実は否定できなかった。

そこで、先年度3月に反省会をもち、この面について5名の英語科担当教師が話し合った結果、一つの方策として、「NHK英語放送を利用しての聞きとり能力の向上」という問題をとりあげ、新年度から実験研究しようと決定したしだいである。

現在NHK基礎英語講座は、毎日20分間、統基礎英語講座は毎日15分間のラジオ放送があり、それぞれテキストを月刊しており、1部50円である。これを学年に応じて所持させ、家庭学習を中心として利用させようとするものである。

2. 研究の方向：一

聞きとり能力の向上は、聴覚的音素の識別力と、その技能の習熟によって期待されるはずである。さいわい、NHKラジオ講座「基礎英語」・「統基礎英語」は、中学校生徒に適した生きた教材であり、これを利用した過去の数名の生徒を観察した結果も、その効果に疑いはないので、全面的にこれを推奨し、まる一か年の利用後は、数値的にいかなる変化があるかを期待し、次のような実験計画を作成した。

44・3・20～25 実験の基礎データを与えるため、1・2年生に聞きとり能力の実態調査を実施 注・実態調査問題は、純粹に聞きとり能力を測定するために、他の技能を除去できるように絵画・図表等を利用し、客観的になるようくふうした。(実物省略)

44・4～ 「基礎英語」を1年生中心とし、「統基礎英語」を3年生中心として、両者のいずれかを能力・希望に応じて2年生に購読させる方針をきめた。

44・12～ 実験方向の吟味をねらいとして、中間的に実態調査を実施してみる。

45・3～ 最終的調査を実施し、前年度のそれと比較検討する。

なお、本校では毎週火曜日第4時は、英語科担当教師の教科研究時間としてとってあるので、この機会を利用して細部の指導法や打ち合わせを行うこととした。

3. 指導の実際

(1) 啓もう活動 3月15日 全校生徒の保護者あてに“まい月50円でできる英語じゅく!”というキャッチフレーズで、ラジオ講座のすすめを配布した。また4月のPTA総会で、特にラジ

オ講座へ協力していただくような趣旨を説明、お願いした。3月28日、修了式直後、ラジオ放送利用の心がまえについて、全校生徒に指導した。

- (2) ヤーク(YERC)の組織づくり 山辺中学校英語のラジオ放送を聞くクラブ(仮称)という頭文字をとり、俗称ヤークの会なるものをつくり、放送利用者は全員この会員とした。普通学級22クラスの中に、それぞれヤーク委員1名が選出され、テキストの配布・代金徴収・ヤークニュースの配布などに当たっている。

注 ヤークニュース まい月、ザラ紙半截で作る新聞のことで、放送の聞き方、ヤークの会としてのニュース・困難な継続利用への元気づけ、その他お知らせなどをのせたものである。

- (3) ヤーク学習会の開催 放課後のクラブ活動その他の理由により、所定の放送時間をききもらした生徒のために、まい週月曜日の放課後30分を基礎英語関係、金曜日の放課後30分間は基礎英語関係にあて、ソノシートを学校から毎月購入してもらい、それを使って学習会を開き、1学期間継続して定着をはかった。
- (4) 外人交歓学生を招待 アメリカンスクールより、女子中学3年生、男子中学1年生それぞれ1名の生徒を6月14日から6月30日まで招待して、本校生徒の英語学習の相手となってもらい、生徒の学習意欲喚起と国際理解の一助とした。そして、この機会を利用して、上記ヤーク学習会を行ない外人生徒にアシスタントとした活躍してもらった。
- (5) 授業中の指導 ラジオテキストの前日分を、ときおり教師が読んでやったり、またその意味を確認させたりしている。これは案外生徒の関心を引きおこすものであり、教師の質問に答えられたものは、ヤーク学習の自信をいよいよ強めるし、一方怠けていた者は、再びやろうという意欲を持ちだすものである。その他関係文型が教科書に出た際は、放送教材を引用したりして元気づけている。
- (6) 特別指導 第3学年の教科書が11月頃より復習教材に入るので、既習事項の確認とおさらいのため、3年生の中のいくつかのクラスで、ラジオ放送を利用した特別指導をとってみた。これは、単位時間のはじめの15分間を、ソノシートを使ってテキスト(統基礎英語)を見させながら学習させるもので、そのあと教科書をやるというふうにしてきた。この方法は、一見時間数の不足がちな現状に、さらに拍車をかけるかのようにも思われるが、その実、とかく忘れられがちな既習の言語材料を、くりかえしたり、応用発展させたりするもので、聞きとりを通しての既習教材の復習にかなりの効果があるように思われた。
- (7) その他の指導 各学年に英語科担当教師がいるので、その教室へは特別にラジオを配給して備えてもらい、関係学年で放課後、校内利用しようとするものに便宜をはかってきた。また、NHKより無料で送付してもらえる“聞きとりカレンダー”を個人にもたせ、聞きとり状況をマークさせ、適時担任教師に提出させることとした。このほか、春の家庭訪問期間中、短縮授業後、全校へ校内放送で、なまの講座を流したりしつつ、とにかく継続利用の意欲をもたせるため、あの手この手の方法をくふうしてきた。

中間・期末テスト等においては、かならずhearingの問題を入れ、聞きとりの重要視と習熟をねらっていることも付記したい。

4. 利用者数の推移

月 別	基礎英語	統基礎英語	在籍に対する%
1 年 4 月	0	0	0%
5 月	22	0	8%
6～8月	117	0	41%
9～12月	118	0	41%
1～3月	45	0	16%

月 別	基礎英語	統基礎英語	在籍に対する%
2 年 4 月	12	132	46%
5 月	8	169	57%
6～8月	8	157	53%
9～12月	9	158	53%
1～3月	51	31	27%

月 別	基礎英語	統基礎英語	在籍に対する%
3 年 4 月	15	201	68%
5 月	6	216	69%
6～8月	2	163	52%
9～12月	2	164	52%
1～3月	5	82	24%

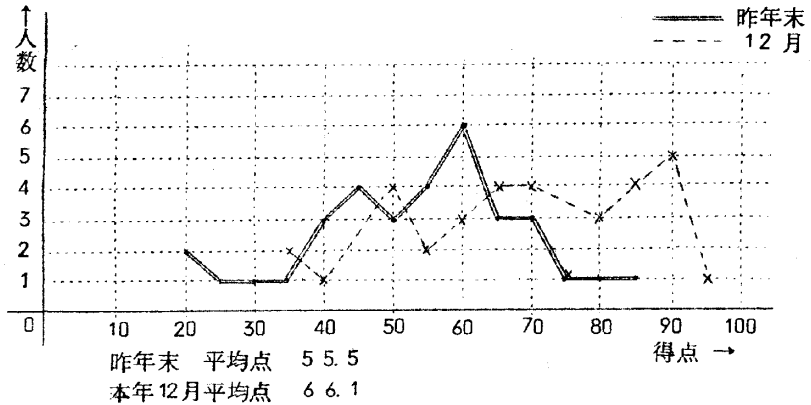
- 注 1. 1年生の4月は、前年度小学生であったため希望がとれなかった。
2. 1年生の5月は、希望者は多かったが、テキストの残部数が、表に記載した数だけしかなかったもので、少数となっている。
3. 各学年とも、3学期には利用者がかなり減少しているのは、学習内容が2学期末からかなりむずかしくなったことと、意欲減退による脱落組がいることを物語っている。この辺が今後の研究課題である。
4. 2年生は当初より能力差をもっと考慮してやるべきであった。表に示すように、統基礎英語から基礎英語に変わったものが、多数いることが、これを示している。

5. 利用の効果

授業中において、新文型・連語等について学習しながら、生徒の中より、それはヤークで習ったというような発言が時折聞かれるようになったことは、よいことだと思っている。また中間・期末テストなどにおいてのhearingが、いままでほど抵抗なく生徒に受取られるようになったことも、一つの進歩だと思われる。

しかし、客観的に数値で計ることができるように、12月中に実施した聞きとりテストを、先年度末のそれと比較すると次のようであり、ラジオ放送利用の効果は明らかである。

- (1) 抽出㉗のクラスの場合（ラジオ利用度良好のクラス）昨年2年生・本年3年生で学級編成変えのなかった組



- (2) 抽出㉑・㉒のクラスの場合（2クラス計76名について本年12月調査）ラジオテキスト利用者と利用しなかった者との比較（3年生）

区 分	人 数	平 均 点
利 用 者	39人	70.5
利用しなかった者	37人	56.5

- (3) 抽出㉗・㉘のクラスの場合（3年生のラジオ利用者のかなり多いクラス㉗と、利用者の少ないクラス㉘との比較）

区 分	平 均 点
ア	66.1
エ	54.3

注 1,2年生については、12月調査ができなかった。それは、昨年度実施の時期が3月であったため、12月では、かなり未習事項が多くあったためである。

6. 今後の問題点

ラジオ講座の利用には、とにかく「継続性」ということに意義がある。ただ与えただけでは、生徒は途中で断念してしまう。前記統計に示すように、第3学期には遂にかなりの脱落を出すにいたった。このことは、テキストの難易、学習者の意欲などいろいろあろうが、じっくり検討して、その対策を考えねばならない。

また、講座の時間的性質から、どうしても家庭学習に頼らなくてはならないが、それを授業とどう結びつけていくかという問題、更には家庭の協力をもっと積極的に求めるには、何かほかに方法はないだろうかなど、多くの研究すべき点をかかえている。「利用すれば効果がある」ことは上記のように証明されているものの、手をかえ品をかえて、彼らを力づけ指導していかなければならない。今回は時期的に中間報告ではあるが、聞きとり能力の向上のため、ひいては英語の学力向上にむかって、さらに邁進したい考えである。

1970年2月

山辺中学校英語研究部

小 林 五 郎
岡 村 芳 一
堤 田 武 亮
太 根 一 久
関 根 一 雄

評

Hearing・Speaking の能力が低下しがちであるという実態を反省し、英語科担当教師が協力しながら全校の生徒を対象に、N.H.K. の英語放送を利用し、これらの能力を向上させるための試みは、実にすばらしい。とくに継続聴取をさせるべく、ヤーク組織をつくったり、放送を聞きのがした生徒のためにソノシートを購入して再放送したり、授業でも許容される範囲内で扱って意欲づけや戒めの機会としたりなど、きめのこまかな配慮や努力を重ねていることには、おおいに敬意を表したい。

英語の力をつけるために放送やテレビの英語講座を利用することは良策であるが、真に価値あらしめるためには長期の継続利用をさせることがたいせつである。そのためには、いろいろな手だてが考えられるが、そのひとつである授業への位置づけも年間指導計画などの関係から限界があるであろう。継続聴取させるためには、最終的に生徒個々の主体的な受けとめ方に待たねばならない。その点、聞きとりカレンダーを個人個人にもたせ、聞きとり状況を生徒自身にマークさせていることは、放送と生徒の主体性とをじょうずに結びつけたすばらしい方法であると思う。